

ロラン・バルト『零度のエクリチュール』の一考察

—サルトル「アンガジュマン」概念への傾斜と差異化

折居耕拓 (同志社大学)

本発表は、ロラン・バルト(1915-1980)の初期著作『零度のエクリチュール *Le Degré de zero de l'écriture*』(1953)における「エクリチュール *écriture*」概念の形成に、サルトル(1905-1980)の「アンガジュマン *engagement*」概念が影響を与えていることを明らかにするとともに、このバルトの「エクリチュール」概念が、とりわけカミュ(1913-1960)の作品に光を当てたことを論ずるものである。

1950年代におけるバルトは、サルトルの影響下にあり、彼の『文学とは何か *Qu'est-ce que la littérature?*』(1947)における作者の「アンガジュマン」の方法に関する議論を基に、自らの理論を練り上げた。サルトルの影響がとりわけ如実にあらわれている著作『零度のエクリチュール』において、バルトは自らが生涯用いることとなる概念「エクリチュール」を初めて提示する。「エクリチュール」は、「作者の死 *La mort de l'auteur*」(1968)に代表される議論においては、文学作品の読解における「読者」の役割を重視する「テキスト」の構成要素として捉えられる。しかしながら、『零度』において、「エクリチュール」はむしろ文学作品における「作者」の役割に関わり、とりわけ、作者と社会との断絶を架橋せんとする試みに結びつけられる。そのような彼の初期「エクリチュール」概念の背景にあったのが、サルトルによる「アンガジュマン」を軸とする文学理論である。

『文学とは何か』の第1章「書くとはどういうことか」において、サルトルが「散文 *prose*」と「詩 *poésie*」という作家が選べる言語における2つの範疇を提示し、後者に対して前者を称揚したのは、後者(詩)が作品の意味内容に対して不透明だからである。それに対し前者(散文)は意味内容に対して透明であり、その実用性を理由に作者の「アンガジュマン」に適しているとされる。

本発表では、上記のようなサルトルの理論を、バルトがいかにか修正したのか、ということに焦点を当てる。ジョナサン・カラーやスティーヴン・アンガーらの先行研究では、サルトルが言語による直接的なコミュニケーションを重視するのに対し、バルトは言語それ自体がもつ間接的なメッセージに着目するとされる。すなわち、バルトは、政治的な効力をもつ言語は透明であるというサルトルの考えを拒絶し、作品の内容ではなく「形式 *forme*」が社会的状況を反映するとして、「形式」による作者の社会への関与を求める。発表者は、カラーやアンガーの議論を踏まえた上で、バルトが作品の形式的側面に見出した「アンガジュマン」が、カミュの『異邦人 *L'Étranger*』(1942)が評価の対象となった所以を明らかにするものであったことを主張する。